(『国語学』第55巻4号　2004.10.1)

追想・金田一春彦先生

芳賀　綏

1

巨星墜つ――とは，かような時のためにある一句ではないか。

金田一春彦の前に春彦なく金田一春彦の後に春彦なし。そうとしか言えないユニークな存在だった。開発された高度の学識の内容は勿論，その表現・伝達も独得の話術・文章術により，そして学者としての生き方，人生のスタイルも独流独歩としか言いようがなかった。空前絶後の感をおさえられぬゆえんである。

巨星にはちがいないが，そそり立つ巨人ではなかった。柳田國男先生や，時枝誠記博士，服部四郎博士のような学者像は示されなかった。学界や世間における座の占め方が全く違った。

カミシモを付けた身がまえはどんな時でも金田一先生にはなく，終生，浴衣がけを変えられることはなかった。官学者と町学者に分ければ，徹底して町学者だった。野人中西梧堂氏を先達の一人として仰ぎ，国語学者では楳垣実氏や三上章氏とウマが合った。

誰の文章だったか忘れたが，これは名文だと金田一先生が言われるのに同感して「硬軟両様，使い分けよろしきを得た妙がありますね」と言ったら「ほう？　でも“硬い”というのはいけないことなんでしょう？」と怪訝の表情をされた。ちょっと文章観の違いを感じたが，浴衣がけの先生には軟らかく，やさしく書く以外は考えられなかったのだ。難しい理論でもやさしく書こうと努力する人は学者の中にもたまにはいる。先生はそうではなく，軟らかく書くことしか意識の中になかった。ポピュラーな存在，大人気の学者として世人が遇した秘密はそこにもあったのだ。

構えて天下を指導する意識が邪魔して大衆と距離が出来るようなことがなかった。高い所から市井を見下す意識のない先生は，庶民そのものの感覚で，ロー・ポジションから物を見る市井の人だった。人情の機微をうがつ川柳のセンスで事物を見ることが，大衆の共感を呼びやすく，理解を得やすかった。

しかも，その根底には確乎たる学問的基礎があり，きわめてオーソドックスな学問的思考法のバックボーンに貫かれていたことは決して見忘れてならないところである。それを欠いたら巨星と仰がれることはあり得なかった。

2

巨星だがそそり立つことがなかったのは，勿体をつけることを知らない性分のせいでもあった。

昭和27年頃かと思う。三省堂編集部の人からご一緒にスケートを，と誘われたのを断って「ボクはいくら転んでも全然恥ずかしくないんです。ただ痛いだろうと思って……」

「全然恥ずかしくない」精神が自ら作成された年譜（古稀記念論文集第三巻）にも顔を出し，「国立国語研究所研究員をくびになり」などとある。かまえた学者ならこんな正直な書き方をしない。随筆に，石黒修氏らを尊敬するようになった頃は現代仮名遣いがいいものだと思い，吉川英史教授らの人柄を慕うようになったら旧仮名遣いがいいような気がしてきた，要するに自分などはそういったミーハー族である，というようなことも書かれた。こう真っ正直に書かれては，金田一春彦は戦後国字改悪の戦犯の一人，と思い込んでいるような人たちは毒気を抜かれるしかあるまい。ロー・ポジションからのうがった見方を得意とする先生には，大局を指導しようといった大上段の意識はもともとなかった。『講座日本語』第1巻中の一節を丸谷才一氏に批判されたのについても，自分の考えが足りなかった，とあっさり書かれた。

どんどん発表するのがいい，書いた中に間違いがあったら謝ればいい，という主義を学生にも説かれたようだ。かまえず，真率にやればいい，というのだった。

先生のソフトな人あたり，繊細な気くばりや都会風のレトリックから，率直に物を言わない，ホンネをかくす人という虚像を描く人もあったらしいが，それは正反対で，ホンネしか言えない人だった。学者と「清貧」のイメージは分かちがたいが，先生は「実利を拒みませんなあ」「けちけち暮らしちゃ学問も人生も面白くないですよ」とよく言われた。国立大学に勤務した間も町学者の気分で通した先生は，官費に頼って研究することが念頭になく，好きなことを書いて好きな本や辞典を売り，また好きな講演をして収入を得ればいいという考えで，得られた収入は大胆に研究費その他に使う金ばなれのよさだった。

物を紛失する名人の先生は，昭和27年，上野から夜行で金沢に着いた朝，果たせるかな探しても切符が出て来ない。上野・金沢間の乗車券・急行券の料金をポンと拂ってスタスタと駅を出られた。二度とポケットを探すこともされなかった。

学界の中心に位置し，学会に欠かせぬ人物だった先生には，同時に“才人”のイメージが強かった。一通りや二通りではない才人だったことは間違いない。真似て真似られるものではなく，真似する気さえ起こさせない才気を思いのままに発揮して生きられた。語ってよく書いてよく歌ってよく，そのために大方の誤解も生じたと思う。それは，独得の話術による講義や講演，放送，読者を吸い込む文章は，才のまにまに流れ出

るのだろうという誤解である。実態は全く違い，時間をかけた呻吟苦吟の所産だった。どんなに心血を注いで工夫を凝らし推敲を重ねられたか，その一端は金田一春彦『日本語教室』（ちくま学芸文庫）巻末の拙文解説に書いたのでそれに譲って紙幅を節するが，スペンサーが道破したように，最少の労力で理解できる文章とは著者が最大のエネルギーを費した産物である，その実践例が先生の談話や文章だった。84歳で大冊『平曲考』を書きおろすほどの体力，人一倍の健康に支えられてこそ可能な仕事ぶりではあったが，うし年生まれでもある先生には才気の裏に“鈍牛”の一面があったことを，正しく理解してほしいと思う。

3

先生が人一倍自然を愛し，親しまれたことはよく知られている。牧野富太郎博士に植物分類学を学び，中西梧堂氏を先達と仰いで野鳥に親しまれた。昭和40年，八ヶ岳南麓の高原に土地を求め，翌年その近くに山荘を建ててそのあたりの別荘地のパイオニアになられたのも，野鳥の一番多く来る所と中西さんに教わったから，と言っておられた。それが縁でその大泉村の名誉村民になり，ついにはその山荘滞在中に倒れられ，最愛の地がいわば終焉の地ともなったのだった。

自然を愛した先生は同時に人間が好きだった。人間観察・人物評を語り，時に書くのが楽しみだった。先生が語られた好きな人は新村出博士や東條操先生，東洋音楽の田辺寿雄博士，国文学の高木市之助博士，豪放でしばしば八方破れの時枝誠記博士。包容力の大きい石黒修氏や温厚で親切な楳垣実氏，徳永康元氏，警抜な奇才三上章氏。同門の先輩では才気の人中村通夫氏，同期生では秀才林大氏に脱帽しておられた。考え方が科学的で知的誠実の人，見坊豪紀・柴田武両氏。領域違いの学者では池田弥三郎氏の人物を信頼され，五十嵐新次郎氏の謹直な人柄を推賞された。随筆家渋沢秀雄氏の人間味をも愛された。京大の池上禎造教授を尊敬され，柴田武氏が「多年に及ぶ池上ファン」ともらされた時はいかにも嬉しそうだった。接触はなかったと思われる学者では，松下大三郎博士の奔放な発想と闊達な文章が大好きで，晩年は「高野辰之博士のような大らかな学者の弟子だったらよかった」と何度かもらされた。伝統芸能や洋楽の世界にも親しい人が多かったと思うが，各界を通じ，圭角のある，常識を受けつけず素直でない物の見方をする人は嫌いだと明言された。

昭和26年晩秋，国語学会で「東西アクセントの違いが出来るまで」という，多年の宿題に対する明快な解答を講演された時，懇親会で平山輝男教授が講演の内容と金田一先生の学問上の立場を激賞する感動的なスピーチをされた。当時少し疎遠だった間柄を超越した平山さんのあの真情に感激したと，半年ほど後に涙を拭いつつ回想された。佐久間鼎博士の謙虚さを回顧して涙を浮かべておられたのは平成15年夏のことだった。

4

先生が学界に不動の地歩を占められたことは学界人ならひとしく認める。だが学説の内容とその本質は必ずしも広く的確に理解されているとは限らない。

国文法では〈単語〉の概念が不明確だ，単語は一定のアクセントを持つもので，すると古典語と現代語では単語の認定を変えなければならない，という主張なども案外すんなりと受け入れられてはいないだろうと思う。論文「不変化助動詞の本質」も発表当時は抵抗が多く，時を経て若い学者たちが modality の研究を進めるに及んでやっと妥当性が理解されてきたところではなかろうか。

古語は国の外周部に残りやすいとする方言周圏説を支持しつつ，一方，音韻やアクセントは周辺部で変化が早く進み新しい形が生まれるという“方言孤立変遷論”（楳垣実教授の命名）も正解されにくい傾きがあり，柳田周圏論の完全裏返しの論のように引用されたこともあった。

アクセントの概念，したがってアクセント変化の概念が理解できない人が学界にも少くはなく，そこがわからなければ「東西アクセントの違い」が現状の形になった経過の精密な推定の意味はわからない。京阪式アクセントが変遷を重ねて到達した姿の一つが東京式アクセント，という論理が飲み込めず奇矯な説と思う誤解が抜けにくいらしいのはじれったい。あの推定の根拠には，先生の学問の精髄であるアクセント史の知識が勿論存在し，また生理・心理両面から考察した精密な「アクセント変化の法則」の発見があった（この法則は戦後初期のガリ版刷りの雑誌『東洋語研究』に発表されたため人に広く知られないのが残念だ）。

それら一々については理解不足があるにもかかわらず，先生の学問のハバの広さ，言語についての博識，その学問の全体像の巨大さを認めない学界人はなかったはずで，専門家以外の人々にもこれだけ信頼を博し，多くのファンを持った学者の存在は稀有のことであろう。旧冬から『金田一春彦著作集』全12巻（玉川大学出版部）が刊行中で，それの味読により金田一学の真髄に対する大方の理解が深まることを願ってやまない。

5

創立間もない国語学会時代から機関誌の編集や研究発表会の司会に献身的に努力され，最初の『国語学辞典』（昭和30年）も中心人物として刊行を実現された。無償の仕事にも凝り性を発揮するのが楽しくてたまらない様子で，初期の学会に対し面倒見のよさを示された随一の人と見えた。企画の名人，名プロデューサーともいうべきだった。

後進に対する面倒見のよさも，類稀だったと思う。先生の人脈を見ればすぐわかるが，学閥意識などは全くない。出身学校の分けへだてがなく，独学無学歴でもかまわなかった。先生が外国人向けの日本語教育の先駆者の一人だと知らない人が案外多いが，

太極拳という健康法を広めた楊名時氏も日本語教育の門弟で，後に京大法学部へ進学した人である。官学者でない先生は，教えを乞う後進は自宅に呼び喫茶店で会い，タクシーに同乗させて相談に乗った。自由な移動塾の主宰者だった。

昭和25年11月，中央線の電車に並んで立ち，「あしたは音声学協会（後の日本音声学会）ですね。懇親会にも出ますか？」と問われた。大学一年生がそんな席に出るものではないと思っていたので，出てはいけないと言われるものと思った。意外にも「積極的に出席して顔を知られておくべきですね」と言われたのには面食らい，かなり緊張した。後進を引き立てる親心，金田一流だと，後にいろんな経験が重なるうちに理解するようになった。

30年ごろか「発表するものが少いですね」と言われた時も全く意外だった。寡作がよい，自信作でもあたため続けて未発表に終るのがあってもいい，と信じていたので，この食い違いは心外だった。しかし，思うに，多作多発表主義の先生の傍にいないで，自分の流儀でやっていたら，研究内容は未発表ばかりで人に知られることなどなかったであろう。昭和26年以来，国語学会で3回口頭発表したのもすべて先生のおすすめがあったからで，特に，“陳述”についての論を発表して服部四郎博士にも認めていただき，その内容を京大の『国語国文』に投稿して阪倉篤義教授に喜んで受け入れていただいたのも，ひとえに金田一先生のご誘掖のお蔭であった。

書きもらせない大恩恵は，昭和27・8年度，九学会連合による能登地域調査に随行したことだ。「東条操先生が連れて行けとおっしゃるけど……」と言われたが，本当は金田一先生が勉強に連れて行こうと思われたのだろう。文法・アクセントの調査の分担は勿論遂行したが，そのほかに地理学・社会心理学・民族学など他学会の研究に一方ならぬ興味を覚え，俄かに視野が開けた。何年か後に自分のテーマを次第に言語と社会，言語と文化を包括する領域に移し始めたのは，あの時の経験が大きな誘因になった。

といっても，能力は知れたもので，大きな飛躍を遂げたわけでも何でもない。秋に刊行予定の『日本人らしさの構造』もその方向の勉強報告の一つだが，これとて半世紀前の金田一先生の短篇「日本文化と日本語」のワクをいささかも超えたものではなく，結局は三蔵法師の掌の中を飛んだだけだった孫悟空と同じで，金田一先生の掌中から一歩も出ていない。それでも先生に報告だけはと，この5月，拙稿の仕上げに余念なかった最中，突如先生の訃報に接し，拙著も御魂に捧げるしかなくなってしまった。予期もしない痛恨事であった。(2004.8.29)

――東京工業大学名誉教授――